

幕末明治の写真師列伝 第二回 下岡蓮杖 その一

下岡蓮杖は、浦賀船政御番所で判問屋を営む桜田与惣右衛門(よそえもん)の三男として、文政6年(1823)2月12日に伊豆下田中原町(現在の静岡地方裁判所裏の田に面した所であった)で生まれた。通称は久之助。この桜田久之助は、一度、六歳の時に、父・桜田与惣右衛門によって、下田町岡方村の土屋喜助(註:この土屋という家は屋号を「才善」といい、現在の「蓬菜館」がある場所にあった)の養子に出されたが、養父母が相次いで亡くなったこともあり、後に桜田家に戻っている。天保7年(1836)、桜田久之助は下田のお店で奉公することを嫌い、僅かな路銀を元に江戸へ出て、絵師となることを志す。しかしながらよき師につくこともできず、鉄砲洲の出雲町七番地(現・銀座8丁目)の田野宇吉こと「加賀屋」という酒屋を頼ったものの(この家の内様が下田宮本氏の出だという縁で)、後に日本橋横山町の大きな老舗足袋問屋に丁稚奉公することになった。

このとき久之助は、「顧客は傲慢なるがへり下り巨萬の富をいたすも、終生他人の足を拝すのか」と嘆き、「絵を学ぶこともできない」と、鬱々とした日々を送っていたが、ある日のこと、「この世の中には先生と呼ばれる多くの人々がいる。であるのに自分は人の足をうやうやしく捧げて、その足袋の寸法を計るのにこれ程の敬意と努力を払わなければならない。何というみずぼらしいことではないか。自分も早く先生と呼ばれる人になりたい」と、ついにはその場限りで足袋商の主人から暇をもらい、ひとまず故郷である下田に帰ることになった。絵師を目指して下田を出てから6年が過ぎていた。

下田に戻った久之助は、何とか下田奉行所の足軽の職を得て、萩野流の砲術を中村藤一郎より学び、大砲を撃つ訓練などもやらされていた。そんな最中でも久之助は絵師を志し、暇さえあれば絵を描いていたという。そんな姿を見ていた砲台監督の中鹿子畑繁八郎(註:「浦賀資料第三」によれば、この人物は畑藤三郎と思われる)という同心が、久之助を憐れに思い、ある日のこと久之助を呼び寄せて、「実は自分の弟は狩野董川(かのうとうせん)の門下にあつて、号を董玉というが、お前がそれ程までに絵師になりたいと思っているなら、ひとつ弟を通じて師匠に取り次いでやってもよいが」という。久之助にとっては願ってもない話である。その場ですぐにお願ひして後、弘化元年(1844)秋、董玉宛の紹介状を懐に、久之助は再び江戸に向かうことになる。こうしてようやく久之助は董玉の紹介を経て、狩野董川に弟子入りをすることができた。

狩野董川の下で、絵の修行をしていた久之助の才能に、師の董川もすぐに認め、久之助に董圓の号を与えてくれた。また師の信頼も厚く、大事な用もしばしば

命じられるようになってゆく。

そんなある日、いつものように旗本某の家(註:三田の薩摩藩下屋敷という逸話もある)に師の使いで出向いた久之助は、親しく口を利くようになった薩摩藩の家人に「世にも珍しいものがあるから、よかつたら見せてやろう」と、座敷に通



下岡蓮杖(中村竹四郎旧蔵
ガラス湿板写真)

に写された男性の立像写真を初めて見た。それは銀板写真(ダゲレオタイプ)であったという。このとき、「これは何かと訊ねると『筆で書いたものではない、器械で写して葉で現したもので、今度初めて長崎へ渡ってきたものである』ということ教わる。尚、家人が言ふには『此の絵は臭気を掛けると絵が消えてしまう』と言うので、手拭を口に当て臭気の掛からぬ様、恐れ恐れ大切に見ました」と、言われている。

久之助は「写真と言うならば、いくら絵筆をもって苦心してもこれにはかなわない。何とかこの技法を学べないものか」と思案していたが、「毛筆の及ばざる所世此の妙技あり、(中略)、筆を折り刷毛を砕き茫然たるもの数日遂に之を学ばんと決意す」(山口才一郎『写真事歴』(『旧幕府』(第参卷第七号、明治24年))と、写真術の習得を志すこととなった。こうして久之助は師の董川にわけを話して、その許しを得て、董川の門下を離れた。

狩野董川の画塾を出た久之助は「なんとか長崎に行つて、この技術を学ぼう」と思い、絵師としての腕を生かして、旅の路銀を絵を描くことで稼ぎ、長崎を目指して旅に出ることを決意した。その前に一度、浦賀にいる父・桜田与惣右衛門を頼りに会いに行くことにした。(次号へ続く)

下岡蓮杖についての参考文献としては、村上文機『玉泉寺今昔物語』(下田・玉泉寺、昭和8年)、前田福太郎『日本写真師始祖下岡蓮杖』(新伊豆社、1966年)、木村克彦『営業写真師の開祖・下岡蓮杖小伝』、山口才一郎『写真事歴』(『旧幕府』(第参卷第七号、明治24年))、藤倉忠明『写真伝来と下岡蓮杖』(かなしん出版、1997年)、石黒敬章編『限定版 下岡蓮杖写真集』(新潮社、1999年)、斎藤多喜夫『幕末明治 横浜写真館物語』(吉川弘文館、2004年)などもあるので、興味のある方はそれらの本をご覧下さい。(森重和雄)